印度學佛教學研究第37卷第2號　平成元年3月

大乘『涅槃経』の一考察

——医学思想に関連して——

幅　田　裕　美

大乘の『涅槃経』には，4種の漢訳，2種のチベット訳，及びサンスクリット断片があるが，これらの諸本を読むと，医学思想と関連した記述の多いことに気づく。そこにどのような医学思想がみられるか，それがどのような意味をもっているかを，サンスクリット本からのチベット訳を中心として考察したい。

『涅槃経』における医学的な記述を検討すると，一般的なものから専門的なものまで種々の記述がみられ，『涅槃経』の編纂者が医学思想に詳しかったこと，また，そのころには，医学思想が広く知られていたであろうことが推測される。古代インドの医学思想，即ちアーユルヴェーダについては，3つの古典が有名だが[1]，*Carakasaṃhitā* の成立は古く，また *Suśrutasaṃhitā* は，後に付け加えられた Uttaratantra もあわせて，最終的成立は3～4世紀と考えられている。これらの医学思想が仏教徒のあいだに広まっていたことは，たとえば，4世紀後半と考えられている Bower 写本が仏教徒によるものであり，*Carakasaṃhitā* や *Suśrutasaṃhitā*（及び Uttaratantra）を引用していることからも明らかであろう。『涅槃経』においても，「八支の医学の究竟論を知る医者が…云々…」という比喩が多くみられる[2]。アーユルヴェーダの八支については説明するまでもないが，究竟論（rgyud phyi ma = uttaratantra）については，さまざまな問題が含まれている。この rgyud phyi ma は，『涅槃経』の教えを他の教えの究竟論として位置づけるために，比喩的にしばしば用いられているが，漢訳に対応のない場合も多く，後に好んで付加された語と考えることができる。また，法顕訳に欠き，その後に成立したと考えられる部分[3]においても，rgyud phyi ma がしばしば言及されており，アーユルヴェーダの rgyud phyi ma のほかに，theg pa chen po'i rgyud phyi ma (*mahāyāna-uttaratantra) という記述もみられる。そこでは，固有名詞としての "Uttaratantra" と普通名詞としてのそれとの両方を重ね合わせて用いていると考えられる。『涅槃経』の医学思想に関連した記述には眼科・小児科・外科のものが多いが，*Carakasaṃhitā* が内科の書，*Suśrutasaṃhitā* が外科の書として知られていること，また *Suśrutasaṃhitā* の Uttaratantra には眼

科・小児科・外科の記述の多いことを考えると，『涅槃経』と *Suśrutasaṃhitā*（特に Uttaratantra）との関係が深いように思われる[4]。法顕は『涅槃経』の原典を Pāṭaliputra で入手したと伝えられているが，*Suśrutasaṃhitā* がインド中東部で成立したことも，『涅槃経』の成立を考えるうえで意味をもつであろう。

そこで，『涅槃経』における医学的な側面を理解する一端として，dhātu と doṣa についての記述を具体的に考察したい。アーユルヴェーダでは，人体を構成し，維持し，相互に協調している要素を，dhātu と呼ぶ。これが適正な比率で正常に機能しているとき，即ち平衡状態のとき，人体は健康であり，それを dhātu-sāmya という。病気とは，その平衡状態が乱れることであり，それを dhātu-vaiṣamya という。vāta (vāyu), pitta, kapha (śleṣman) の tri-doṣa については説明を要しないであろう。身体の構成要素である dhātu については，bhūta, 即ち地・水・火・風・虚空の変形したものであり，それらの集まったものが身体であると考えられている。仏典では古く阿含から，身体の構成要素として四大，即ち地・水・火・風を考えるのが主流であるが，『涅槃経』では，この4つの dhātu と，vāta, pitta, kapha の3つの dhātu については，チベット訳と漢訳の間でしばしば混用がみられる。この dhātu と doṣa に関連した記述のなかで最も興味深いのは，チベット訳 D. 110a1-4 (P. 113a4-7) の部分である[5]。ここでは，「pitta などの dhātu が動揺して」と，tri-doṣa が dhātu として説かれ，さらに，病気の種類を4つあげている。法顕・曇無讖両漢訳では「四大」となっているが，チベット訳をみると4つの dhātu を説いているのではなく，pitta による病，vāta による病，kapha による病，そしてこれらの doṣa が共存することによる病が説かれている[6]。アーユルヴェーダでは3つの doṣa が全部共存する場合を saṃnipāta というが，チベット訳の cha 'dus pa は，これを意味していると考えられる。また，『涅槃経』には，チベット訳で rims nad rnam pa brgyad, 曇無讖訳で「八種熱病」という記述があるが[7]，これも同様の病気の分類によるものであり，Uttaratantra において，tri-doṣa によるものが3種，samasta (saṃnipāta) によるものが1種，dvandva (saṃsarga) によるものが tri-doṣa の組合せにしたがって3種，āgantu が1種，あわせて8種の熱病が説明されているのと対応する[8]。これらの病気は，dhātu の不調和であり，それを治して，dhātu を均衡な状態にするのが医者の治療の根本とされるが，『涅槃経』においては，煩悩を病，即ち dhātu の不均衡に，dhātu の平衡(dhātu-sāmya)を tathāgatagarbha, buddhadhātu に喩えている。そこで，チベット訳の yang dag pa'i khams は法顕訳の「平等

性」に相当する語と考えられるが，そのサンスクリット語を dhātu-sāmya と推定できるのではないだろうか[9]。

また，ここでは，仏性の原語のひとつと考えられる buddhadhātu という語が説かれているが，この比喩を考察すると，医学思想における dhātu という語を仏教思想を表現するために取り入れたのではないか，という仮定が成り立つであろう。もちろん，この dhātu という語については，古く原始仏典以来多くの仏典において種々に用いられてきたものであり，『涅槃経』における dhātu がそれらの意味から離れたものであるとは考えられない。しかし，『涅槃経』と医学思想との関係が少なくないことを考えると，『涅槃経』における dhātu を検討する場合には，医学的な意味をも考慮しなければならないであろう。たとえば，lus kyi khams という記述がチベット訳にみられるが[10]，この dhātu を医学的な意味，即ち身体を構成する要素として読むならば，容易に意味を理解することができる。また，tathāgatagarbha や buddhadhātu について lus la という表現の伴うことが少なくないが[11]，そこでは，医学的な意味が重ね合わされていると考えられる。しかし，それはあくまでも比喩的に用いられているのであって，先に uttaratantra について述べたように，その語を医学思想から取り込みながらも，『涅槃経』の教えを説くためとしての意味を与えていったということが，この dhātu という語にも言えるのではなかろうか。したがって，その意味の二重構造を考慮しながら内容を理解する必要があろう。dhātu という語そのものが複雑な意味を含むために，比喩的な側面があまり注意されていないようであるが，garbha などと同様に，比喩的言語表現として考察されなければならないと考える。

---

1) チベット訳 D. 51a5 (P. 51b4) に sman dpyad rig pa gsum (cf. サンスクリット断片SI P/89) という記述があり，法顕・曇無讖両漢訳には対応がないが，これが三古匠 (Vṛddhatrayī) を指しているとすると，Vāgbhaṭa の年代は7～8世紀とされているから，かなり後の付加となるであろう。2) D. 34a1 (P. 34a8), 131a1 (135a1), etc. 3) D. 28b5-29b1 (P. 29a5-29b8), 曇無讖訳 (大正蔵12. 376a3-28)。 4) 『涅槃経』の rgyud phyi ma が *Suśrutasaṃhitā* の Uttaratantra を指すという指摘は妥当と思われる（高崎直道「大乗の大般涅槃経梵文断簡について」『仏教学』第22号，1987)。 5) 法顕訳 (大正蔵 12. 885c22), 曇無讖訳(410c2)。 6) このような4種の病気の分類は『金光明最勝王経』第24品 (大正蔵16. 448a19) においても明確に説かれている。 7) D. 132b6 (P. 136b8), 曇無讖訳 (420a22)。 8) *Suśr.* (KSS) 6. 39. 14. 9) 高崎直道『如来蔵思想の形成』p. 179では *bhūtadhātu? と推定されている。10) D. 82b5 (P. 84b4), 118a4 (121b4). 11) D. 96b5 (P. 99a6), 98a7 (101a2), 109a5 (112a7), 113a1 (116a6), etc.

＜キーワード＞　大乗涅槃経，uttaratantra, dhātu

（北海道大学大学院）